

白鳥の群れは旅立ちに備ふらし

雪消えし田に餌を啄む

(R)

大石田の言葉

東北を出ると、大石田の方言はなかなか通じず、「にゃーにゃーと猫みたい。」と言われます。また、「んだねあつす。」「こんにちはつす。」「じょうだい(常代?)お世話さまつす。」言葉の語尾に“す”を付けると丁寧な言い方になります。

『齋藤茂吉随行記 上・下巻』板垣家子夫著書の中では、板垣さんや町の人、茂吉先生も「くしてけらっしやいっす。」「くなつす。」「くだべつす。」「くだつす。」と、疎開していた昭和二十年から二十一年、みなさん丁寧な物言いをしています。

四月三日は旧暦のお雛祭。雪も少なくなつて、旦那衆のお家の座敷にそれぞれに自慢のお雛さまが飾られます。少し緊張しながら出かけ、「お雛さま、見へでけらっしやいっす。」「見でけらっしやいっす。」「とご挨拶を交わします。「座つて見でけらっしやいっす。」「迎えてくださる方も丁寧に対応してくださり、緊張しながら、くじら餅や雛あられ、甘酒を頂きました。女の子が健康やかに良く育つようにと願いを込めて飾るお雛さまですが、あらたまつた作法や振る舞いも求められ、良き教育の場になっていました。言葉と心が繋がっていく大切な文化です。・・・

雀始めて巣くう(すずめはじめてすくう)

3月20日～3月24日頃

朴(ほう)の枝は杖のようにまっすぐ伸びる。身の丈のそれを折り、根本側に足をのせ梢側を握る。摺り足のまま進めば朴の皮がむける。これで「朴の木スキー」の出来上がり。堅雪の斜面に立てば朴の木スキーは滑りだす。堅雪の上を渡っての登校では物足りず、故意に山を越しての登校である。(海藤忠男)

桜始めて開く(さくらはじめてひらく)

3月25日～3月29日頃

「おひなさまみせでけらっしゃい」と子供達だけで旧家をまわったものです。長いろうじを通して高く飾られたお雛様を見上げ「ウあーかわいい」と豊かな気持ちになった事覚えています。帰りにはあぶったくじら餅をいただきながら次の家に向かいました。周りにはまだまだ雪があったような気がします。(と)

雷乃声を発す(かみなりこえをはつす)

3月30日～4月3日頃

お雛様は一年中暗い所で家族の健康を守ってくれています。雛祭りには感謝の思いで甘酒、くじら餅、紅白のゆで卵、上生菓子、ちらし寿司、にら卵汁、筍、あさつき、菜の花、など季節のご馳走をお膳に盛り付けます。「どうぞあがってけらっしゃいす。」女雛、男雛から小さなお人形まで笑っているようです。(み)



2015.4.2 大石田のひなまつり

読書会だより ⑩

大石田の春分のころ

七十二候より

大石田町立図書館

風は冷たいものの、雪の心配はしなくてもいいようになりました。早春の山では、一番に「まず咲く」マンサク(万作、満作、金縷梅)の花が満開です。

『大石田のひなまつり』は月遅れの四月二、三日。代々大切にしている色々な年代のお雛様や小さな愛玩具を拝見しながらお家を訪問するのは、楽しみです。町の人とお喋りやおいしい振る舞いも。